

第242回 令和8年6月3日（水）

「西洋の敗北について」

エマニュエル＝トッドさんの話題作「西洋の敗北」を読みました。肯定する意見も多いですが批判も多い本です。「考えさせられる」意見が述べられており、大事なことはそれを読んだ後自分の意見はどうなのかを確かめることだと思います。

同盟国として1945年からアメリカに追随してきた我が国の在り方を見つめなおすようにトッド氏は主張します。ロシアとウクライナの戦争はロシアとアメリカの代理戦争であり、これにアメリカが敗北したことが明白であるということが主張されています。

ガザやベネズエラ、イランに肉薄するトランプ政策はロシアへの敗戦を認めないためのカムフラージュである、中国との経済戦争でもアメリカは後れを取っている、アメリカの権威は下落しており、日本の立ち位置も微妙になっていると述べています。

ここは意見が分かれるところですがトッド氏はアメリカに頼ることなく日本も核武装をするべきだと主張します。被爆国日本にとっておそらく受け入れることは難しい提案だと思います。

アメリカの暴走やヨーロッパの右傾化が鮮明になり、東アジアにある日本は台湾有事が現実味を帯びる中、果たしてアメリカが守ってくれるのか、疑わしいと思っている人は少なくないのではないのでしょうか。とはいえ、過去の歴史に鑑みて自己防衛のための武装化には反対する人も多いと思います。

「いまそこにある危機」に目を背けることなく、どうするべきかを議論しなくてはなりません。「急がば回れ」ということわざがありますが、私は問題解決のヒントは「教育」にあると考えています。

急進的な意見を流し続ける動画やネットで育った世代は戦争へのハードルが低い。戦後80年で戦争経験者が少なくなっており、人々の戦争に対するイメージが「絶対に非戦」から「防衛のためにはやむを得ない」に変わろうとしている。

誰もが戦争を望んでいるわけではないのはわかります。しかし若い世代は戦争に踏み切ることに對する抵抗が明らかに薄れているような気がします。

大国ほど戦争は悪であるというイメージを教育されるべきです。戦争は民間人や子どもたちを数多く巻き込みます。戦争で命を落とす人にとって理屈など関係ありません。お年寄りや子どもの命を奪う犯罪行為に正義があるはずがないのです。